

アメリカン・ロックのルーツとブルース、ヒルビリー、ゴスペルの関係性をめぐる研究

The Roots of American Rock'n'Roll and the Relationships among Blues, Hillbilly Music and Gospel Songs

プロジェクト代表者：

當間 千代子（経済学部・准教授）

Chiyoko Toma (Associate Professor, Dept. of Economics)

研究経過

ロック・ミュージックのルーツには、ブルース、ジャズ、ゴスペル、カントリー・ミュージックがあると考えられている。このうち、ジャズに関してはそれ自体で膨大なジャンルを形成しているため、本研究の対象からは意図的に除外することとした。従って、本研究ではブルース、ゴスペル、カントリー・ミュージックが、アメリカ南部という文化圏でどのようなかたちで複雑に絡み合いながら共存していたのか、そしてそれが1956年にエルヴィス・プレスリーというひとりの青年のうちに集約されるかたちでロック・ミュージックという新たな音楽形態へと引き継がれていったのか、この一連の流れを継続的に明らかにしていくことを目的としている。本年度の研究は、ブランド・ウィリー・マクテルの音楽に焦点をあてた。その結果、ブルースの起源を象徴すると考えられている彼の楽曲のひとつ「トラヴェリン・ブルース」が、イングランドとスコットランドのバラッド（カントリー・ミュージックの起源）の影響から南北戦争時に生まれた黒人バラッドと呼ばれるジャンルに分類されるもので、両者はブルースの基本構造であるも12小節形式を特徴とする点が明らかとなった。このことは、ブルースの起源にカントリーがあることを示している。またマクテルは別の楽曲「キリスト者であることは」においては、エヴァンジェリスト（ゴスペルのストリート・シンガー）の一面を見せている。このことは、当時アメリカ南部の黒人たちのあいだに奴隷として主人である白人とともに教会礼

共に同伴するという習慣があり、そこで自然とゴスペル（賛美歌）を聞き覚え、それが黒人音楽のなかへ自然と融合していったという、文化的背景を示している。このようなかたちで本年度の研究においては、マクテルというひとりのブルース／ゴスペル・ギタリストを通して、ロック・ミュージックの起源であるブルース、ゴスペル、カントリー・ミュージックが20世紀初頭のアメリカ南部文化圏においてどのように共生していたのかというひとつの事例を明らかにした。なお本研究の成果そのものについては、それを研究論文ないし口頭発表というかたちで報告する段階にはいまだ至ってはいないが、成果の一部については、それらを下記の研究成果において反映させることができた。

研究成果

<論文>

- 「マテリアル・ガールのレトリックについて」（情報文化論、第7巻、2006年12月）

<口頭発表>

- 「1970年代を中心とする英米ポピュラー音楽におけるジェンダー・パフォーマンスの意義について」（日本ポピュラー音楽学会第18回大会、2006年12月3日、東京大学駒場キャンパス）
- 「マテリアル・ガールのレトリックについて」（情報文化研究会、2006年7月9日、國學院大學渋谷キャンパス）
- 「A Self-Portrait of Patti Smith: In-between Destruction and Regeneration」（英語）（表象文化論学会第1回大会、2006年7月2日、東京大学駒場キャンパス）